

「こうすればみんなが主役になれる ～地域も職場も女も男も～」

第1分科会

コーディネーター：伊藤 恭子（NPO法人高齢社会をよくする女性の会）

パネリスト：池田 陽子（特定非営利活動法人「JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん」
代表理事 理事長）

野老 真理子（大里総合管理株式会社 社長）

池谷 照代（藤枝市男女共同参画推進センター「ぱりて」運営協議会 会長）

要旨

立場が異なる農業協同組合や民間企業、自治体機関で活動する3名のパネリストから異なる視点で地域で取り組んでいるモデル事例を紹介した。農業協同組合である「JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん」では“ネットワーク(拠点)”を構築し、高齢者や要支援・要介護者を支援している事例、民間企業である「大里総合管理株式会社」では、不動産業でありながら、仕事の一部として地域の様々な課題に積極的に取り組み、300を超える地域活動に取り組んでいる事例を紹介した。また自治体機関である「藤枝市男女共同参画推進センター「ぱりて」運営協議会」は、公の立場を活かし、行政ヘシニアの立場から様々な課題の提言や啓発活動の取り組みを紹介した。また、グループワークでは、参加者が4つのグループに分かれ、介護の問題やボランティア活動、男性の社会参加促進等について様々な意見交換を行い、各グループの意見を発表し、参加者全体で共有した。

第1分科会



【伊藤】

私は、こちらの第1分科会のコーディネーターを務めさせていただきます、伊藤恭子と申します。高齢社会をよくする女性の会の運営委員でございます。よろしくお願いいたします。みなさまどうぞ、前の方にいらしていただけたらいかがでしょうか。グループディスカッションもさせていただきますので、どうぞ前の方にお掛けいただくということで、お願いしたいと思います。

それでは、今タイトルにもございましたように、『こうすればみんなが主役になれる。地域も職場も女も男も』ということで、始めさせていただきますと思いますが、私どものパネリスト、池田陽子さん、野老真理子さん、池谷照代さん。それぞれの各地からお越しいただいております。時間の節約もございまして、さっそくお始めいただくかと思いますが、いかがでございましょうか。池田陽子さん、どうぞ。まず、お一人当たり15分ということで、パワポを使いながら、各地の大変ユニークな活動を報告していただきます。そういった流れの中で進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。



【池田】

どうもみなさんこんにちは。私、池田陽子でございます。ではこれから少し、私たちが主役ということでございますので、住み慣れたところで、住み慣れた家で、生き生きと輝いていきたいという、自分たちの思いを主張しながら、地域を作ってきた、そんな事例を報告させていただきたいと思っておりますけれども、私は、15分という時間を与えられましたので、15分の中では、パワーポイントを使っているとなかなか、時間オーバーになってしまうかなと思ったものですから、こんな資料を用意させていただきましたので、この資料を使いながらお話しをさせていただきたいと思っております。



“あんしん”して暮らしてゆける里づくりの目標

私どもは、特定非営利活動法人でございます。しかし、この特定非営利活動法人になったのは、25年の4月でございます。その前は、あづみ農業協同組合という中で、福祉課というところから、福祉の事業を通じて、地域の役に立っていきたいということを考え、活動してまいりました。やはり農業協同組合の基本理念ってというのは何かっていいますと、社会の役割をきちんと果たしていきたい。そして、明るい社会を作りますっていうのを、自ら地域を作っていくという思いで、協同組合は立ち上がったわけですから、そのメンバーシップのみなさん方と、どういう地域を作っていくのかっていうのを、福祉の視点から考えてまいりました。私はその福祉というところに当初は関わっておりました。私自身、JAあづみという中で、福祉というのは、正に平成10年の、3月から始まりました。この3月のときに、私自身が福祉課を立ち上げていくのにどうしたらいいのだろうかってことを考えたときに、当たり前には人として生きていくんだ、そのときに、必ず若い人は年を取るし、突然に、若いから急に年を取るわけではない。そしたらその、なだらかに、地域の中で安心して老いていける里を自らの力で作ろうじゃないかっていうところから、みなさん方の1ページのところに書いてありますように、私は、安心して暮らしていける里づくりの目標というのを考えました。

活動地域

私たちJAあづみというのは、安曇野市と松本市にまたがっております。市としましては、安曇野市は9万8000人の人口。そして松本市は24万という人口を抱えているんですけども、その中のかつてのJAあづみという農業協同組合の管内の中で、私たちはNPOの活動を、現在しております。なだらかに老いていく、当たり前で老いていくってことはどういうことかっていったら、若い方は学びもありますし、働くこともあります。

2018年1月22日(月)

住み慣れたところ、住み慣れた家で、生き活きと輝いて生きたい

◆◆ 人と人の支え合いの循環が、あんしんして暮らせる里をつくる ◆◆

協同組合 JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん
代表理事理事長 池田 陽子

“あんしん”の活動地域・・・安曇野市 & 松本市

1. “あんしん”して暮らしてゆける里づくりの目標

一人ひとりの暮らしを生きがいとともにつくっていく

- ① 活力ある高齢者づくり・・・元気なうちから生きがいづくり
- ② 高齢者の人格の尊重と自立支援・・・援助を受けながらも自分のことができる暮らし
- ③ 支え合う地域社会の形成・・・困ったときはお互い様の支え合う暮らし
- ④ 利用者から信頼される介護サービスの確立・・・介護保険制度としての信頼のサービス

① 心豊かに子どもたちがあんしんして暮らせる地域

② 高齢者たちが生き活きと生きがいを持って生かされる地域

① 地域に軸足を置いた自主的な協同活動

- 1 -

【池田】

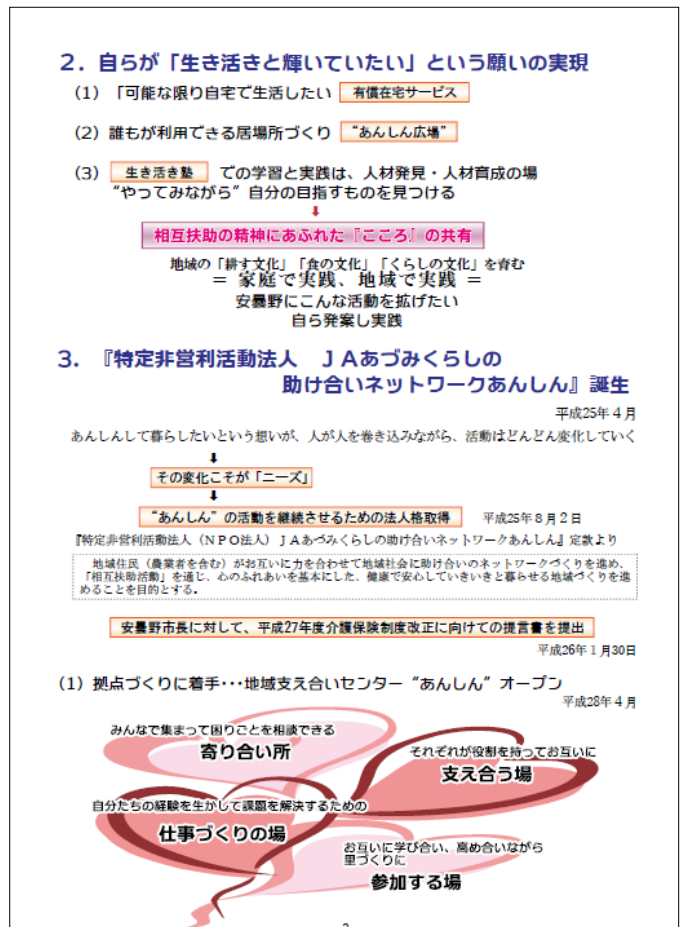
そして働く中に生きがいを求め、そして自分の生き方を追求しながら生きていきます。ですから若いうちは、一生懸命生きがいをづくりをしよう。そしてこの時代を過ぎていく中で、地域の中でよりどころを作っていこうよ。そしてもう一つは、ときとしては病気になるかもしれない。ときとしては交通事故に遭うかもしれない。ときとしては障害を持つかもしれない。そんなときに、たった一人になっても、病気になっても、地域の中で老いていけるような、介護保険制度の隙間になれるようなサービスを作っていこう。そして、65歳以上になったら、地域の中で介護保険を使いながら、安心して地域に支えてもらいながら老いていく道を作りたい。これが念願でした。

それが結果としては、高齢者は先輩として、地域の子どもたちと一緒に、この安曇野市の中でどうあるべきかを探りながら、高齢者と、そして子どもたちは生き生きとこの地域の中で明るく生きていくような、それを自主的な意思を持ちながら、自立しながら共に作っていこうじゃないかっていうところから、農業協同組合の中にいるときから始まってまいりました。ですから、最後まで自宅に生きられる地域。そして、最後まで地域で暮らすには何が必要なんだろうかっていうことを、常に追いつけてまいりました。

自らが「生き活きと輝いていた」という願いの実現

2ページのところをご覧くださいますと、そこで私どもが作ってきたのは、今お話ししましたような、その隙間、介護保険制度に入っていく中において、本当に困ったときはどうしたらいいだろうかっていう、有償在宅サービス。介護保険制度では、どんどん新しい方向に変わっていきます。どんなに変化しても、地域は安心して老いていける里を作りたいために、有償在宅サービスという一つの方向。

そして、誰しもが地域の中で、隣近所支え合いながら、安心して老いていける、安心して暮らせる場所。そしてこのことをやり続けていくためには、地域の中に人材が必要なんです。このときにはどうしてこういう地域の中で私たちは、頑張って老いていかなきゃいけないんだろうか。生きていかなきゃいけないんだろうかということでもって、生き活き塾という学びの場を作ってまいりました。この学びは、ただ頭で吸収するだけじゃなくって、私たちが何を必要とし、何があれば地域で老いていけるかっていうことを、考えてまいりました。そのことを考え実践していく中におきましては、私たちは、その中から、農業、そして福祉、そして食という問題を中心としながら活動を生み上げてまいりました。

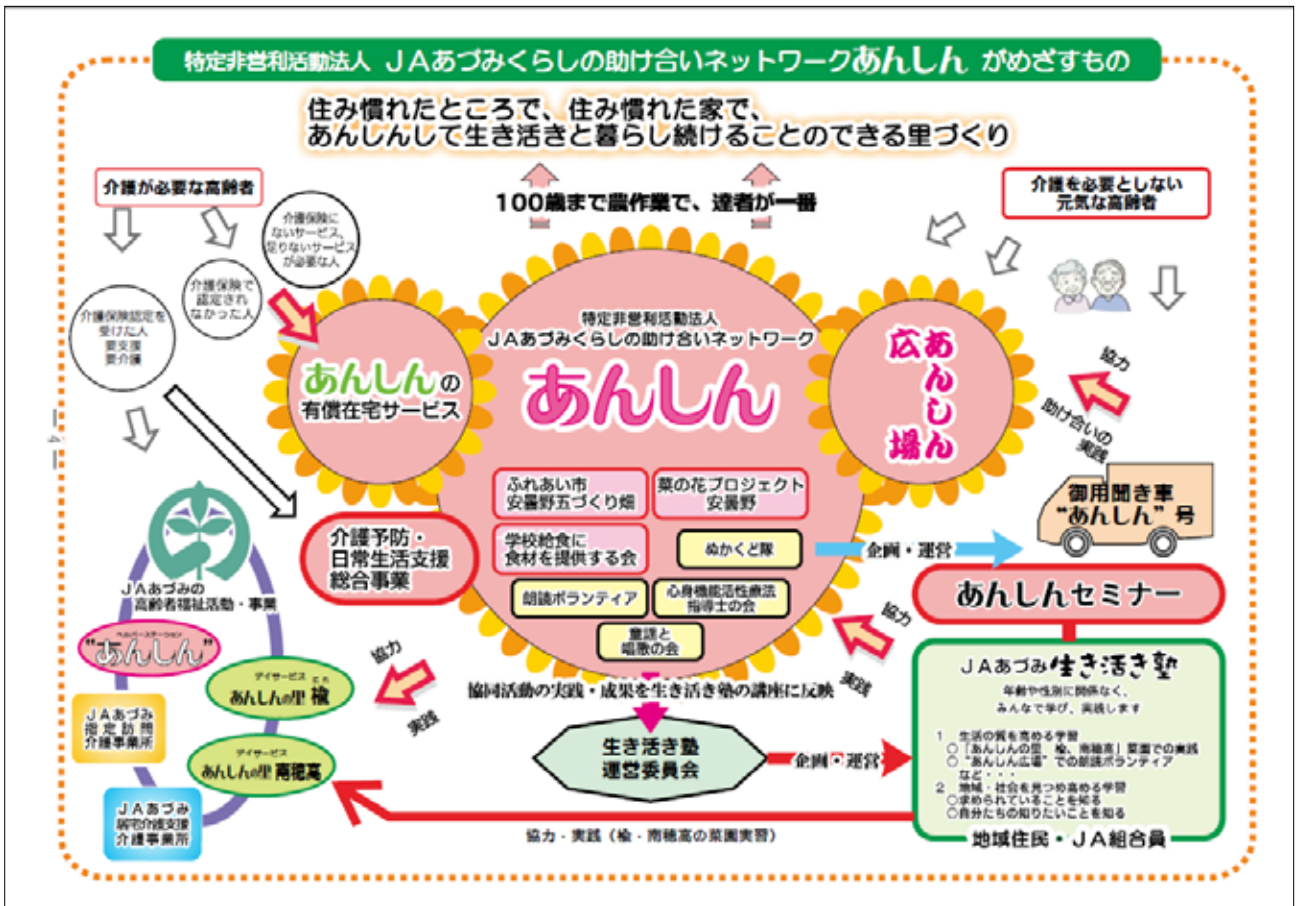


【池田】

それがみなさん方の、一番最後の、4ページにございます、この絵図でございます。私たちは有償在宅サービスをやりながら、そして安心広場を作りながら、そして生き生き塾という学びの中から何をやってきたのかっていいますと、『特定非営利活動法人JAあづみ暮らしの助け合いネットワークあんしん』という丸が真ん中にございます。そして、赤い色に塗ってあるところは、ふれあい市安曇野五づくり畑、菜の花プロジェクト安曇野、学校給食に食材を提供する会、ぬかくど隊、朗読ボランティア、心身機能活性療法指導士の会、童謡と唱歌の会、正に、赤いところは事業でございます。

そしてクリーム色のところは、地域で私たちが生きがいとして活動していく。この活動の一つの方向は、高齢者が地域の中で生き生き活動しながら、そのことを子どもたちと一緒に活動する。ですから菜の花プロジェクト安曇野なんかは、油を作って学校給食にプレゼントする。そして学校給食に食材を提供する会では、学校給食の野菜を作って学校給食に提供する。そして子どもたちと一緒にご飯を食べてくる。そして私たちの生きがいづくりとして、年金が少なくなっても小遣い稼ぎができるよねっていう、この五づくり畑というところで野菜を売っていく。

そんな思いで、少しずつ私たちはこの中から、小遣いを稼ぎながら、生き生き暮らす、生きがいを見つけています。



【池田】

あんしん広場

右側の端っこのところにあります、あんしん広場でございます。あんしん広場っていうのは、高齢者の寄り合い所です。この寄り合い所のところでは、お茶を飲んだり、いろんな活動しています。そこのところでどんどん、10年も12、13年も続けてまいりますと、どんどん高齢者は年を取って行って、お買い物にも行けなくなります。ですから私たちは、自分たちの力で、このご用聞き車あんしん号というのを買いました。170万円でした。これは正に、自分たちの活動費と、そして寄付と、そしてまかないまして、なんとかこのあんしん号を買って、地域の高齢者が困っているところへ出かけていながらやってまいりました。

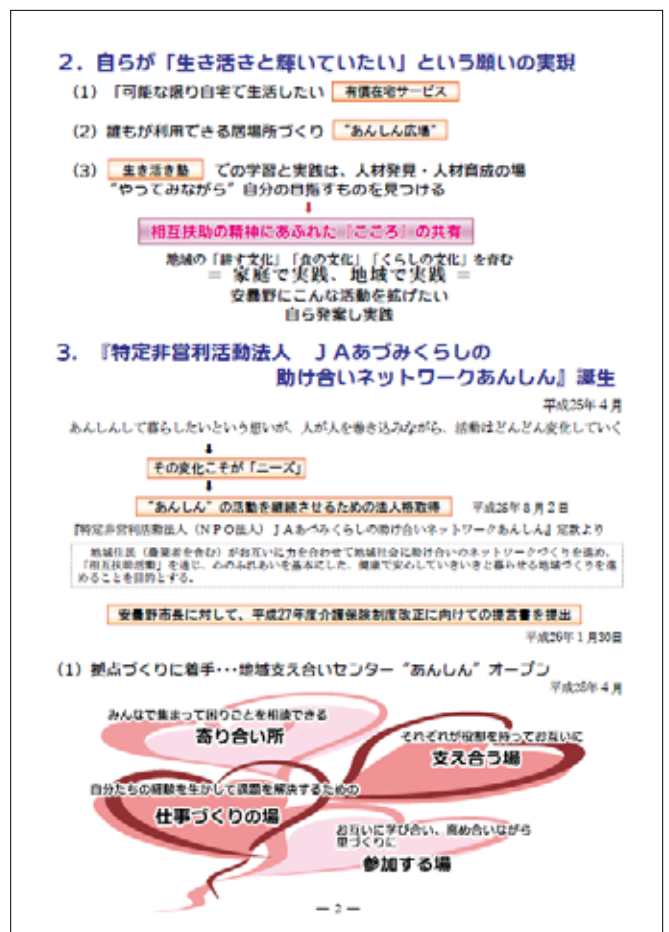
あんしん有償在宅サービス

左側のところにあります、あんしん有償在宅サービスは、介護保険制度の隙間を埋める活動としてやってまいりました。その下のところがございます、介護予防日常生活支援総合事業は、今年度から、介護保険が緩和されてくる中で、軽度な要支援、要介護の人たちにとっては、大変今、どこへというよりも地域の中で、安曇野市なり松本市内で、地域の中でどうぞ面倒見てもらってください、こういうことになりましたので、私どもはここで、この事業者としての資格を取りまして、介護予防日常生活支援事業総合事業も受けて、正に、老いていくための道のりを自分たちで作りに続けてまいったところでございます。

「特定非営利活動法人 JAあづみくらしの助け合いネットワークあんしん」の誕生

なぜ私たちは、NPOに歩みを切り替えてきたのかっていうと、私たちは安心して暮らせるという思いを継続していくために、2ページのところがございますように、変化こそがニーズ。そして、私たちは地域のニーズを受けて、こうあってほしい、あああってほしいという思いを貫いていく。その中においては、私たち自身としては、NPOになることによって、この一つの思いを、継続的に事業的に進めていく。そのことを考えたときに、私たちは安曇野市へお願いしまして、市長さんに提言書を書いて、地域でこういう生き方をしたいんですって申し上げまして、私たちとしては拠点づくりに着手しまして、28年の4月に地域支え合いセンターをオープンしました。寄り合い所、支え合う場、仕事づくりの場、参加する場として、今生き生きと活動しております。

今現在は、この場所ができたことによって、生活支援整備体制、そして拠点介護予防事業者としての位置づけもいただきまして、民生委員さんとか、区長さんとか、地域の方々と一緒に、安曇野市というこの地域の中で、私たちはどうやっていったら高齢期を生き生きと輝いて生きていけるのだからかっていう道のりを作り続けてまいりました。



〔池田〕

住民の支え合いの仕組みづくり

3ページの2番目のところにございますように、住民の支え合いの仕組みづくり、コミュニティへの第1歩って書いてありますが、私たちは確かにあづみ農業協同組合という一つの器の中でやってまいりました。しかし、地域の人誰でも参加できるというNPOという道のりの中に、もう1歩を踏み出すことができました。そうしましたら、やはりこのNPOが、地域の役に立っていくためにはどうしたらいいだろうかというところから、先ほどお話ししたような、生活支援整備体制事業の中の生活コーディネーターとしての役割をいただいていた、介護保険改正の中において、新しい総合事業への、訪問型サービスのAだとか、通所型サービスのAだとかCだとかというようなことをやりながら、私たちは地域において、元気な高齢者をつくっていく。そんな思いを重ねてまいりました。

立ち上げたときの想いを基本に、活動を継続させる

今年で福祉課が立ち上がりまして、約20年でございます。なだらかに老いたい、当たり前で老いたいと言って作ってきたことは、3ページの4番目のところに書いてありますように、立ち上げた想いを基本に活動を継続してまいりましたら、私たちは地域包括ケアシステムの中の一員として、地域支援の役割をきちんと果たしていけるだろう。それは、介護予防は地域づくりへの副産物と書いてあるのですけれども、今までの介護予防の姿から、これからの介護予防の姿はこう変えていくよっていう中においては、社会参加として高齢者が生きがいをもって生きていく。そして、居場所集いの場、支え合いの場、これは、子どもたちが当たり前で安心して育ていける場になっていけるだろう。

最後のとこに書かせていただきました、私たちが自分たちの思いや願いを実現できる場所で、生きがいづくりや健康づくりや仲間づくり、そして、地域の文化づくりを通じて、安心して暮らせる里を作り続けたい、そんな思いで、私たちは住み慣れたところ住み慣れた上で、生き生きと輝いていきたい。正に、自分たちが主役、主体になって作り続けてまいりましたこの活動を、報告させていただきます。以上でございます。

「地域支え合いセンターあんしん」は自治に集まれるたまり場・寄り合い所として、仲間づくり、健康づくり、生きがいづくりを通して、地域住民同士の見守り、相談活動を行っています。

要介護になっても、障がいを持って、この地域で安心して住み続けるための支え合い環境を整えてまいります。

地域の区長・民生委員の協賛・協働し、住みがいあんしんの仕組みづくりが生まれることを考えています。

(2) 「住民の支え合いの仕組みづくり」・・・コミュニティづくりへの一歩

① 生活支援整備体制総合事業推進会議の開催（安曇野市穂科地区）平成28年
※安曇野市生活支援体制整備事業推進委員会契約

↓

地域資源のリストづくり サービス提供の見える化

② 平成29年介護保険制度改正の中で新しい総合事業への参加
介護予防・日常生活支援総合事業（新しい総合事業）への参加

4 立ち上げたときの想いを基本に、活動を継続させる
そして、私の20年後あんしんして暮らすために、
 地域包括ケアシステムの一員として地域資源の役割を果たす

介護予防は地域づくりの副産物

これまでの 介護予防の姿	➔	これからの 介護予防の姿
要介護状態にならない 介護予防		地域で暮らし続けるための 生活支援
要介護予防策	対象	すべての高齢者
身体・精神機能の向上	めざすもの	社会参加
介護予防サービス （1次・2次予防）	サービス・活動	居場所・ つどいの場・支え合い

私たちが掲げた『なだらかな老い』を感得することは、社会参加することで介護予防につながるかと積極的にとらえ、私たちが自分たちの想いや願いを実現できる『場所』で、生きがいづくり・健康づくり・仲間づくり・地域の文化づくりを通じ、あんしんして暮らせる里をつくり続けたい。

- 2 -



【野老】

みなさんこんにちは。千葉県の九十九里浜から来ました、大里総合管理の責任者の野老真理子と申します。仕事は不動産業、建築業、管理業。仕事をして、会社を作って44年目に入りました。私はその2代目経営者です。年商でいくと5億円ぐらいの会社です。社員さんは25人ぐらい。外で働いてくれている、現場を受け持ってくれている社員さんたちもいるので、その人たち合わせると、大体50人ぐらいになりますが、この50人の構成はですね、65歳以上の人たちが半分います。そして一番年上の方は90歳。90歳の方も半日だけ働きに来てくれています。私は社員さんたちの甲辞は自分が読むと決めています。何回も読むことができましたけども、どんなふうに頑張ってくれていたのか、そんなことをそういう場所で話すと、家族の人たちに喜んでもらえて、家族の人たちにもその活躍を知ってもらうことで、とってもいい関係になってると思います。



残った人たちはどんな人かという、母子家庭の人だったり、ハンディキャップを持っている人だったり、それから一度、刑務所だとか、そういうところにお世話になって戻ってきた人だったり、薬物中毒の人だったり、ありとあらゆる様々な人たちが、残っている、もしくはそうじゃないところの能力を生かしてくれて、この会社を支えてくれています。大体ここに来る理由っていうのは、うちの会社が地域活動、私たちは地域貢献活動という言葉を使いません。企業の一つとして地域に暮らす、仕事させてもらう企業の一人として、この地域で様々な課題は、我が課題じゃないか、こんなふうに思って、一緒になってやろうっていうふうにしてきましたので、その数が300を超えているって状態です。



大体不動産業ですから、アパートを斡旋したり、もしくは新築を立ててそれを売らせてもらったりっていうところでの仕事を本業とするとですね、本業を43年間赤字になったことはありませんけども、赤字にしないように社員さんたちが頑張ってくれている、本業が大体、労働時間の中で6割ぐらい。4割は平均すると、4割の力は、社員さんたちが地域活動をしてくれている。そんな会社です。

【野老】

例えばですね、会社の中にはグランドピアノがあるんですけど、地域の方が入ってきて、「大里さんいいわね、グランドピアノがあって」なんて言う。私たちは掃除を通して気付く訓練をしていますので、その方がなんでそんなことを言ったかな、そうしてよくよく聞いてみると、お嬢さんが一生懸命大学まで出て、「ピアノ習ったけど就職するときにはピアノを使えないのよ」、こんな会話から、もったいないな、生で音楽聞けないのにな、弾けないのか、ということで、その方に、ピアノを弾いていただく。我が社にはたくさんの音楽活動がありますけど、そういう方たちが、チェンジする。余裕がなくてすいません。私の言葉で想像してもらっていいですか。そういうことで、例えば昼休み、場所がない、どこでやるんだってなると、昼休みは仕事が止まっているわけですよね。そうすると、仕事として使われてない空間としてあるんだっていうことで、今度は昼休みになると、どこにもなく地域の方たちが入ってきて、演奏家の方が来て、演奏されてまた帰ってくる。ないっていうんじゃなくて、あるっていうふうにすると、本当にある。そういう活動をたくさんしています。

もう一つ、2階では、地域の主婦が日替わりでシェフになるレストランが、もう10年以上やっていますけども、これもまた、2階で小さな台所で、私たちがご飯を作って食べてたら、「大里さんいいわね、みんなでご飯食べれて」、こんなふうに地域の方が言われました。よくよくその方に聞いてみると、そのご飯もそうなんですけども、よくよく聞いてみると、ご主人が現役でお子さんが一緒に同居していたときは大きなお鍋で作ったのよ、あっという間になくなったのよ、でも今はご主人が退職されて、お子さんが独立されて、小さなお鍋に作っても何日も残るのよ、こんな話をしてくださって。

その話から、「ああ、この方お料理が上手なんだ、お料理好きなんだ。作れていないことを嘆いているんだ。」地域では、手作りのものを食べられない人がいっぱいいるのについていう、こういうことにつながり、その方にお願ひし、その方と同じような方を募集し、地域の方が日替わりのシェフになってレストランをするっていうので、それもまた10年以上続いている。

ピアノからコンサートへ

地域の主婦が
日替わりシェフの
コミュニティーレストランキッチンから
コミュニティーレストランへ

【野老】

つまりですね、人と出会って、その人が抱えてる悩みや、要望や何かを聞き取りながら、その人を主人公に、その人にその課題を解決する側に立ってもらおうという、そういうサポート、支え、そんなことをしながら、一つの地域活動を生み続けていって支えていってということで、その周りの人が、それを利用してくださる。そんなかたちの地域活動が300を超えている状態です。



【野老】

通常ですと、利益になるかな、これは仕事かな、社員さんだったらそうやって判断するでしょうけど、こんなことを続けているということですね、うちの会社の社員さんたちは、巡り合った人たちの、いろんな話をしたときに、これは大切なことなのかな、自分たちにできることなのかな、そんなふうに判断してですね、自らがやり始め、それでも残業なんか一人前の仕事があるわけですから、それはそれで、朝に晩に伸ばしながら、なんとかクリアしていく、この世にブラック企業って言われて批判されるけれど、私は自分の会社を、明るいブラック企業だと思っています。

一人一人が自分の仕事としてそれを大切に、そのことが結果として、労働時間が長くなっていくっていうこと。その人たちは誰かの役に立っているっていうことで、やり続けてくれていることに、ありがたいなっていうふうに思うし、彼ら彼女らが不幸な顔しているかっていうと全然してなくて、そんなことを、どっかできちんと話す機会があったらなあというふうにも思っています。

今日はみなさんの中に、資料として、うちの会社でやってる様々な地域活動のいろいろな資料を持参しました。例えばこんな、地球塾なんていう、これもあると思うんですけど、今50人の人が先生になってやってくれています。我が社は不動産会社なんですけども、例えば接遇しているとき以外には、その場所は空いている。会議室も会議していなければ会議室は空いている。コピー機でも、我が社がコピー機を使っていなければ、コピー機は空いている。事務用品も机も、会社で仕事していなければ空いてるじゃないかっていうことで、この全てを地域の人たちに開放しています。

地域なんて言葉もあんまりイメージとして、一人一人がそういうニーズを持っていたら、どうぞお使いください。収益を伴う事業の方がお使いになるときは、いくらいただく。けども、地域のために、活動されるために会議をするのよなんていうことは、無料で開放しています。ですから、我が社は片っぽで不動産業の看板はかけていますが、地域の方たちは、我が社を不動産業だと思って来ません。明るい公民館のように、会議室を使い、もしくはレストラン食べに、もしくは小物を飾ってある場所に行きっていう。

この地球塾もですね、団塊の世代の方たちが地域に帰ってくるって言われた頃、ご相談を受けまして、「うちの亭主ずっとうちにいるのよ、なんとかしてくれない」なんていう会話を面白がって、その方とお話したときに、サラリーマン時代に培ってきたもの、もしくは趣味や特技でやってきたもので、何か提案できるもの、みんなに教えてあげられることないですかなんて話をしたら、みんなそれぞれ持ってまして、今50人のそういう方たちが先生になって、最高齢は90歳の方です。この方、奥さん亡くなって20年経つんですけども、こないだ結婚したんです。素敵な話でしょ。やっぱりみんなに伝えたいと思う一つなんですけど、中国茶のことを塾で教えてください。その生徒さんと、20歳下の生徒さんと結婚されて、会社の中で、みんなでお祝いしたんですけども、そんなふうに、一つ一つ。

第22期 地球塾 あなたも先生

～次章のありえどアツシブルの魂～

2019年3月31日(土)
14時～(13:30開場)
定費自由900円

開講期間：平成30年1月5日～3月31日

開催場所：大東総合管理(株)：大東白雲市みやこ野2-3-1 TEL:0475-72-3475 FAX:0475-72-4001

1. 習字(外)教室 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 月曜(第1-2-4) 9:00～10:30 金曜(第1-2-3) 8:00～10:30	2. 習字(内)教室 田中幸代 習字(内) 習字(内) 習字(内) 習字(内) 月曜(第1-3) 10:00～11:30	3. 足もみで身体をほぐそう 足もみ(外) 足もみ(外) 足もみ(外) 足もみ(外) 月曜(第1) 10:30～11:30
4. 漢字の勉強(外) 田中幸代 漢字(外) 漢字(外) 漢字(外) 漢字(外) 月曜(第1) 13:00～14:30	5. 中国茶(外)とはどんなもの 中国茶(外) 中国茶(外) 中国茶(外) 中国茶(外) 月曜(第3) 15:00～15:00	6. 楽しい習字教室 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 月曜(第3) 13:00～16:00
7. 習字(内)教室 田中幸代 習字(内) 習字(内) 習字(内) 習字(内) 月曜(第2) 13:30～15:00	8. 骨盤体操 田中幸代 骨盤体操(外) 骨盤体操(外) 骨盤体操(外) 骨盤体操(外) 月曜(第4) 14:00～16:00	9. ペンシルで遊ぶ 田中幸代 ペンシル(外) ペンシル(外) ペンシル(外) ペンシル(外) 月曜(毎週) 18:00～19:15
10. タンゴ(外)ダンス大賞 田中幸代 タンゴ(外) タンゴ(外) タンゴ(外) タンゴ(外) 火曜(第1) 9:00～12:00	11. 夕やけ(外)ダンス 田中幸代 夕やけ(外) 夕やけ(外) 夕やけ(外) 夕やけ(外) 火曜(第2-4) 9:00～10:30	12. 日本舞踊(外)大賞 田中幸代 日本舞踊(外) 日本舞踊(外) 日本舞踊(外) 日本舞踊(外) 火曜(毎週) 9:30～10:30
13. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 水曜(第1-3) 10:00～11:30	14. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 水曜(第2-4) 10:45～11:45	15. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 水曜(第2-4) 11:00～12:00
16. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 木曜(第1-3) 13:00～15:00	17. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 木曜(第1-2-5) 12:00～15:00	18. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 木曜(第2-4) 12:00～16:00
19. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 金曜(第1-3) 13:30～16:00	20. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 金曜(第2-4) 16:00～18:00	21. 習字(外)の使い方 田中幸代 習字(外) 習字(外) 習字(外) 習字(外) 金曜(第3) 16:00～18:00

【野老】

私はですね、誰もかれもが、一人一人が自分の人生の主人公だと思っています。主人公として生きるためには二つの要件が必要だと思っています。一つは、仕事でもいい、趣味でもいい、特技でもいい、なんでもいい、何かやるものを持っているということ。

そしてもう一つは、それを分かち合える仲間がいるということ。家族だけじゃなくてもいいから、友達でも知り合いでも誰でもいい。それを分かち合える。この二つを、きちんと巡り合った人が、この人はこの二つ持ってるかな、持っていないとしたらここが足りないからっていかたちでコミュニケーションしながら、その人を主人公にするドラマを作っていくということが、結果として、一つの不動産会社が、こういうところでこういうことを話させてもらうことにもつながるし、そのことがきっかけになって、不動産の売上にもつながっているということ、本当にありがたく思っています。うまく説明はできませんでしたが、このぐらいで。

